〔古今著聞集五和歌〕承安二年三月十九日、前大宮大進清輔朝臣寶莊嚴院にて、和歌の尙齒會を行けり、○中略大常卿顯廣王、

年を經て春のけしきはかはらぬにわが身はさらぬおきなとぞなる

〔古今著聞集十八飲食〕ある人のもとに、わかきさふらひ共よりあひて、大雁をくはんとて、したゝめける所へ年寄たるさふらひ一人來たりければ、いかゞして此雁をくはせじとおもひて、殿へめされ給に、いそぎ參り給へと、わかき侍共いひければ、老たる侍、この雁をわれにくはせじとて、かくいふとは思ながら其座を立て、かた〳〵にてかくぞよみける、

こゝろえつ雁くはんとてわかたうが老たる物をはじきだすとは

〔撰集抄八〕爲賴歎老苦事

むかし爲賴中納言の、內へ參り給ひて、年比むつましかりける人々の、おはする方へいでおはしけるほどに、いかなる事の侍りけるにや、若き殿上人たち中納言をうちみて、皆隱れ忍びたるさまに侍りければ、中納言うち涙ぐみて、

いづくにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人しなければ、と讀て、立かへり給ひにけり、涙のみおつるまでに思ひ給へる、よく思ひ入給へりけるにこそ實にとしたけぬれば、心もかはり、つぎ〳〵しくなるまゝに、人にはいとはるゝに侍り、不老門にのぞまねば、老をとゞむるにあたはず、誰も又おゐをいとへば、扨は老ぬる身をば、いづくにかおかんと歎に侍り、されば老人は、老人を友としてこそ侍るべきに、それは又むつかしくて、若き友にまじらはほしき事に侍るなり、然れば是も老苦のかずにや入侍るべき、

〔おほうみのはし〕風早中納言實種、寶永七年薨、老のゝち、あつき日、內にさぶらひて、みづをのませけるをみかど御らんじて、老いたる人は水をのむことといむなる物をと、おほせられければ、取りあへず、